日本ヴィクトリア朝文化研究学会

第 26 回全国大会プログラム

（中央大学後援）

日 時: 2026 年 11 月 21 日（土）10:00〜20:00

場 所: 中央大学茗荷谷キャンパス （〒112-8631 東京都文京区大塚1丁目4−1）

（対面形式のみの開催となります）

★受付　9 時 30 分より

★研究発表（10:00~11:35）

第一室　2 階 2E03 教室

研究発表 1：司会　松浦愛子（名城大学）

ガブリエル・エンソヴェンの戯曲創作にみる世紀転換期ロンドン演劇界の動態：未公開一次史料の精査と新たな表現の模索から

堀　祐子（慶應義塾大学）

研究発表 2：司会　浅野菜緒子（Pace Gallery Japan, Registrar／学習院大学・聖心女子大学（非））

ローレンス・アルマ＝タデマ《春》の成立をめぐる一試論：演劇と建築の観点から

渡邉千華（京都大学大学院）

第二室　2 階 2E04 教室

研究発表 1：司会　庄子ひとみ（順天堂大学）

“We want a home and an occupation, Conny; a real, living occupation.”——Amy Levy の *The Romance of a Shop* における芸術と女性の協働

山本菜々美（成城大学大学院）

研究発表 2：司会　Neil Addison（日本女子大学）

トマス・ハーディ「不死鳥亭でのダンス」における音楽性と女性表象——社会規範の内面化をめぐって

永盛明美（京都大学国際高等教育院（非））

★シンポジウム（13:00~15:25）3 階 3C13 教室

クラブ・秘密結社からみたイギリス文学——ゴシック小説から世紀末まで

司会・報告　榎本　洋（愛知県立大学名誉教授）

報告　亀井伸治（中央大学）

報告　加賀山卓朗（英米文学翻訳）

★特別講演（15:40~16:55）3 階 3C13 教室

ヘルマン・ムテジウスと英国――ドイツ近代デザインの展開における英国の役割

司会　山口惠里子（筑波大学）

池田祐子（三菱一号館美術館館長）

★総会（17:00~17:30）3 階 3C13 教室

★懇親会（18:00~20:00）地下 1 階 食堂

【研究発表】第一室 2 階 2E03 教室

研究発表 1：ガブリエル・エンソヴェンの戯曲創作にみる世紀転換期ロンドン演劇界の動態：未公開一次史料の精査と新たな表現の模索から

堀　祐子（慶應義塾大学）

本発表は、V&A 博物館演劇部門の祖として知られるガブリエル・エンソヴェン（Gabrielle Enthoven）の劇作家としての側面に光を当て、世紀転換期のロンドン演劇界の動態を再考する試みである。彼女は有能なコレクターである一方、オスカー・ワイルドから詩を献呈されるなど当時の演劇人・文学者と幅広く交流し、自らも戯曲を執筆した。しかし、その創作の実態は未解明である。本発表では、彼女の未公開演劇スクリプトのテクスト分析を軸に、劇構造や女性表象の特徴を検証する。さらに、プロの女優や劇作家として名を残さずとも、彼女が演劇界の結節点として果たした役割を考察する。V&A および大英図書館所蔵の未公開一次史料をもとに、演劇生産を支えた人的ネットワークと劇作活動の実態を明らかにし、従来の Enthoven 像を再考する。

研究発表 2：ローレンス・アルマ＝タデマ《春》の成立をめぐる一試論：演劇と建築の観点から

渡邉千華（京都大学大学院）

本発表は、後期ヴィクトリア朝の画家ローレンス・アルマ＝タデマ（Lawrence Alma-Tadema, 1836–1912）による油彩画《春》（1894 年、J・ポール・ゲッティ美術館）に関して、同時代演劇と建築史という 2 つの観点より、細部と主題を再検討した上で、演劇と建築が本作の着想にあることを示す。本作は、画家が約 9 本の舞台作品の背景画・衣装デザインを手がけた、1880–1901 年の間に制作されたものである。また彼の絵画は、古代建築を詳細な調査と正確な描写によって再現する技量によって知られ、同時代の建築家からも称賛された。作品分析は、画家が携わった舞台美術のデザイン画、画家が目にした古代地中海建築及び英国の古典主義建築、そして画家の発言を組み合わせて行う。本作は 1920–50 年代のハリウッド歴史映画の手本となったことがマリオ・アマヤらによって指摘されているが、本作のみを扱った先行研究ではこの観点からの考察が僅少であるため、発表者は本作を舞台芸術及び空間芸術の文脈に置くことで、映画の参照源となった条件を明確にする。

【研究発表】第二室 2 階 2E04 教室

研究発表 1：“We want a home and an occupation, Conny; a real, living occupation.”――Amy Levy の *The Romance of a Shop* における芸術と女性の協働

山本菜々美（成城大学大学院）

Amy Levy (1861–1889) は、フェミニズム批評の観点から再評価が進んでいる 19 世紀末のユダヤ系女性作家である。代表作の *The Romance of a Shop* (1888) において、四姉妹の次女 Gertrude は「生きている実感を伴う職業 (a real, living occupation)」による自立を切望し、姉妹の協働で写真館の経営に乗り出す。本作の先行研究は、そうしたガートルード個人の主体の確立を論じてきた。しかし本発表では、レヴィが William Morris (1834–1896) による壁紙や過去の女性作家たちの作品などに言及しながら、姉妹の協働をどのように効果的に表現しているかに着目する。姉妹は、詩人であるモリスが壁紙の制作に携わっていることを例に挙げ、女性の労働に対する固定観念を覆そうとする。また、過去の女性作家たちの作品への言及は、姉妹が抱える不安や苦悩の歴史的な意味を浮かび上がらせる。このような分析を通じて本発表では、本作における芸術が個人の自己実現の手段ではなく、女性たちがともに働き、生きるための糧となっていることを明らかにする。

研究発表 2：トマス・ハーディ「不死鳥亭でのダンス」における音楽性と女性表象――社会規範の内面化をめぐって

永盛明美（京都大学国際高等教育院（非））

トマス・ハーディは、同時代、シモンズやワイルドらが都市の踊り手を描いた一方、ウィリアム・バーンズらと同じく農村地帯を背景に近代化で失われゆく伝統的イングリッシュ・カントリーダンスの情景を描いた。こうしたハーディのダンス表象は、後のセシル・シャープによるカントリーダンス復興とも共鳴し、文学による伝統的ダンス文化の記録、継承を担っている。この種のダンスは、その背後に潜む欲望やヴィクトリア朝の規範からの一時的解放（永盛 2025）、また女性の踊り手への性的不均衡な共同体による制裁の反映という側面を持つ。これを踏まえ本発表では、ハーディによる詩「不死鳥亭でのダンス」（1898） へのテクスト分析を通し、女性自身がヴィクトリア朝の社会規範を無意識裡に内面化し、抗いがたい力としてその規範への回帰を希求する過程に焦点を当て、ハーディによるダンスを描いた他の詩作品と異なる女性表象の在り方を明らかにする。

永盛明美「『不死鳥亭でのダンス』における『清く正しき』女性」『眼差しの詩学――トマス・ハーディに見るジェンダー表象の一側面』英宝社、2025 年、133–52 頁。

【シンポジウム】3 階 3C13 教室

クラブ・秘密結社からみたイギリス文学――ゴシック小説から世紀末まで

文学・文化研究において、女性サロン、クラブ、秘密結社は、コーヒーハウス程には幅広く考察されてこなかった。前者の女性サロンが啓蒙主義などの思想の揺籃所となり、いわば外部から文学形成に与っているのに対し、後者のクラブ、秘密結社などは 19 世紀になると多くの文学作品で直接取り上げられているにもかかわらず、殆ど等閑視されている。このシンポジウムでは、イギリス、ドイツなどの小説に見られたクラブ、結社の世界に注目し、それがどのようなテクスト解釈を産み、どのような人物を創造し、どのような文学世界を創出したのか考察したい。

クラブ、この気になる存在――ヴィクトリア朝とその後

司会・報告　榎本　洋（愛知県立大学名誉教授）

19 世紀の主に男性作家の小説には、見逃すことのできない存在としてクラブ・結社が登場する。それらは作品の背景で枠組みや仕かけとして機能していることが多いが、世紀末には豊穣なクラブ文学なるものを生むのである。本発表ではまず 19 世紀のクラブについて紹介し、そこを根城とするクラブ・マンの特徴を論じる。次に、クラブ文学の近現代的な発展の頂点としてスティーヴンスンの作品を考察する。そして最後にクラブ・（秘密）結社という組織が如何なる新たな人物像を生み出したかを提

示したい。クラブ・結社に注目することで domestic novels (or novelists) 主体の研究とは異なった英文学の相貌が垣間見えるのではないだろうか。

二つの世紀末と結社の小説

亀井伸治（中央大学 ・ドイツ文学）

1790 年代、ドイツの通俗文学作品の英国への流入は、ゴシック小説にも新たな局面をもたらした。「秘密結社小説」という名称で統括され得る作品の英訳を中心とするサブジャンルの形成は、そのひとつの結果である。結社の悪巧みと暗躍を描くそれらの物語では、当時の欧州における政治的擾乱、既存の秩序や価値の転覆への不安、降霊術などの非合理的要素が、結社のモティーフの内に融け合わされている。英国での人気の背後には特に、自国への革命の波及に対する懸念と陰謀論の流布があったが、これは、ヴィクトリア朝末期に外国の謀略や社会主義・無政府主義の脅威の噂が広がった状況とよく似ている。しかも十九世紀末の英国では、一世紀前のオカルト流行を思わせる神秘主義や魔術結社も盛んになっていた。そしてここにもまた、社会の不安を反映した秘密結社の小説が幾つも現れた。報告では、これら二つの国と二つの時代の作品について、その特徴や背景を考察する。

新たなヒーローとしてのスパイたち

加賀山卓朗（英米文学翻訳）

現代イギリス文学の特徴的なジャンルのひとつであるスパイ小説は、たんに諜報技術（トレードクラフト）や派手なアクションを伴うエンターテインメントというだけでなく、国家対個人、欺瞞や裏切り、忠誠心、倫理観など、さまざまなテーマを扱いながら、映像メディアも巻きこんで独自の発展を遂げてきた。スパイ小説は、ヴィクトリア朝末期の社会不安や 20 世紀半ばの冷戦など、多分に時勢の影響を受けた文学であるが、その裏には、とくに 19 世紀初期から形成されたヒーロー像（スコット、ディケンズ、キプリング、ドイルなど）とアンチヒーロー像（デフォー、サッカレー、コンラッドなど）の並存、融合という大きな流れがある。報告では、そうした観点から代表的な作家と作品の位置づけを試みたい。

【特別講演】3 階 3C13 教室

ヘルマン・ムテジウスと英国――ドイツ近代デザインの展開における英国の役割

司会　山口惠里子（筑波大学）

池田祐子（三菱一号館美術館館長）

19 世紀以降、第一次世界大戦によって決定的に袂を分かつまで、英国とドイツは緊密な関係にありました。1871 年に成立した新興国家であるドイツ帝国は、特に産業面において、常に英国を手本としていました。本講演で採り上げるデザインの分野でも、英国の影響は非常に大きなものでした。その事例として、サウス・ケンジントン博物館（現在のヴィクトリア＆アルバート博物館）を手本に、ドイツ各地に設置された工芸博物館があります。なかでも最初のベルリン工芸博物館の開館を強力にサポートしたのが、ヴィクトリア女王とアルバート公の長女で、後のフリードリヒ三世の妃ヴィクトリアでした。

ヘルマン・ムテジウス（Hermann Muthesius, 1861–1927）は、1907 年に結成されるドイツ工作連盟のイデオローグとして、20 世紀初めのドイツ近代建築・デザインの展開に極めて重要な役割を果たした建築家・批評家です。彼は若き日に、官庁集中計画のために、お雇い外国人として日本に三年半滞在したのち、帰国を経て、1896 年から 1903 年まで駐英ドイツ大使館の技官としてロンドンに赴きます。

彼の任務は、英国における建築や社会インフラ、デザイン政策などを調査し本国に報告することでした。彼が執筆した記事は様々な雑誌媒体に掲載され、結果として、アーツ・アンド・クラフツ運動そしてマッキントッシュやヴォイジーなど同時代の新しい建築家・デザイナーたちをドイツ（語圏）に本格的に紹介した初めての人物となります。なかでも、彼が多大なる関心を寄せたのが英国の（戸建）住宅建築で、1904 年には英国滞在中の詳細な調査研究成果を三巻からなる『英国の住宅』に纏めて出版しています。そして帰国後は、政府官吏としてドイツにおける工芸（教育）改革に尽力し、建築家として質の高い郊外住宅を数多く手がけました。

本講演では、19 世紀の建築・デザインにおける英国とドイツの交流・影響関係を簡単に確認した後、このムテジウスが、英国から何を学び、20 世紀のドイツでそれをどのように生かそうとしたのか概観します。加えて、妻アンナ・ムテジウス（Anna Muthesius, 1870–1961）がファッションの領域で果たした先進的な役割にも注目します。

★懇親会について：プログラム会場と同じ建物の**地下 1 階食堂**にて 18 時から開催。

会費・申込方法については別途会員用 ML にてご案内いたします。

★エクスカーションについて：大会翌日、有志で**三菱一号館美術館**に行きます。こちらの申込方法についても会員用 ML にてご案内いたします。　（問い合わせ先：松本靖彦 matsuko@rs.tus.ac.jp ）

交通アクセス

東京メトロ丸ノ内線　『茗荷谷駅』から徒歩約 1 分

会場情報

１階にスターバックスコーヒーの店舗があります。ご昼食については、茗荷谷駅周辺にコンビニエンス・ストア、ファミリーレストラン、その他飲食店があります。